平成24･25年度沖縄県教育委員会指定『教育課程』研究校

平成25年度（最終年次）

研究のあゆみ

国頭村立国頭中学校

は じ め に

学習指導要領の改訂に伴う新教育課程が完全実施されました。学習指導要領の趣旨を反映した教育課程が円滑に実施できるよう，各教育活動の編成及び実施に取り組む必要があります。

これまで本校は，平成17年度～19年度の３年間，県教育委員会の指定を受け，進路指導の研究を行ってきました。各学年間の系統性のある進路指導や「キャリア教育」の視点を取り入れた授業の研究が行われ，多くの成果を残すことができました。

平成23年度から「学びの共同体」の理念による学校改革・授業改革に取り組んでいます。教師主導の「教え込む授業」から生徒主体の「生徒の考えから出発する学び」に切り替え，「習得・活用・探究型学習」や「言語活動」の充実に努めてきました。「学びの共同体」づくりの三つの柱に①授業改善②同僚性の構築③保護者の学習参加を掲げ，活動的で協同的で表現的な学びの構築により，「全ての子どもの学ぶ権利の保障」を目指してきました。

また，全職員が，授業を公開し，「生徒の学びの姿」を視点とした研究協議で，教科の壁を越えた授業改善に取り組んできました。そして，学校行事・会議の精選や週時程表の工夫・改善等により，授業時数の確保に努めてきました。

このたび，沖縄県教育委員会から，平成24・25年度『教育課程』研究校に指定されました。「学習指導要領の趣旨を具現化するための教育課程の編成及び指導方法の工夫改善」を研究の視点に，「一人ひとりに応じたきめ細かな指導を行うための指導内容・指導方法・指導体制に関する研究」を進めてきました。５月24日には，「学びの共同体」の提唱者である学習院大学教授の佐藤　学先生をお招きし，自主公開授業研究会を開催することができました。昨年度から，小橋川春武国頭村教育長のリーダーシップにより，村内全小・中学校（７小学校＋１中学校）で「学びの共同体」の理念に基づく学校改革・授業改革が始まりました。とは言え，まだ研究を始めたばかりで課題も山積しています。今後，これまでの研究成果を引き継ぐとともに，より実効性のある『教育課程』研究を積み上げたいと考えています。今後とも変わらぬご批正を賜りますようお願い申し上げます。

むすびに，本研究の推進に当たり貴重なご指導･ご助言をいただきました国頭教育事務所・国頭村教育委員会並びに，本研究の諸活動に物心･両面よりご支援を賜りました国頭村当局に心から感謝申し上げます。

平成25年11月29日

国頭村立国頭中学校
校　長　　神元　勉

激励のあいさつ

沖縄県教育庁国頭教育事務所
所　　長　　金　城　聰

本校が，沖縄県教育委員会・国頭村教育委員会から「教育課程」の研究校として，二年間の指定を受け，本日ここに最終年次の研究成果を発表されますことに対し心からお喜び申し上げます。

さて，平成20年に公布された学習指導要領において，確かな学力を育成するために，基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させることと，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力，表現力その他の能力をバランスよく育成することが求められております。

本県においては，沖縄２１世紀ビジョン基本計画，沖縄教育基本振興計画において「確かな学力」の向上を図ることが位置づけられ，平成２４年度より学向上主要施策「夢にぬふぁ星プランⅢ」で「キャリア教育の視点を踏まえた『確かな学力』の向上」「『わかる授業』の構築による『確かな学力』の向上」「学力向上マネジメントによる『目標管理型評価システム』」の３つの柱を施策の中心として位置づけ幼児児童生徒の「確かな学力」などの「生きる力」の育成に努めております。

そのような中，本校においては，「学習指導要領の趣旨を具現化するための教育課程の編成及び指導方法の工夫改善」を研究の視点に「一人ひとりに応じたきめ細かな指導を行うための指導内容・指導方法・指導体制に関する研究」を通して学校改革・授業改革に取り組んでこられたことは，時宜を得た誠に意義深いものであります。

さらに「きき合い　学び合い　支え合う　協同的な学び」を研究主題に掲げ，教師主導の「教え込む授業」から生徒主体の「生徒の考えから出発する学び」に切り替え，「習得・活用・探究型学習」や「言語活動」の充実に努めている本校の実践は生徒一人ひとりの「確かな学力」向上に大きく寄与しているものと確信いたします。

本日ご参会いただいた先生方が，本校の研究成果を明日からの教育実践に生かし，邁進されることを願ってやみません。

結びになりましたが，熱心に研究実践に取り組んでこられました神元勉校長をはじめ，諸先生方，学校の研究実践を支えてくださいました保護者・地域の皆様並びに国頭村教育委員会のご支援に対しまして心から感謝を申し上げます。本研究を契機として，今後とも本校の教育実践がますます充実・発展しますよう祈念申し上げ，挨拶といたします。

平成２５年１１月２９日

目　　次

Ⅰ　グランドデザイン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１
Ⅱ　校内研修全体構想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２
Ⅲ　研究の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３
　１　研究主題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３
　２　主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３
　３　研究内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３
　４　研究方針・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４
　５　研究組織図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４
　６　研究経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５
　７　授業研究の具体的な取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　７
　８　成果と課題及び対応策・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　８
　９　参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　９
Ⅳ　パフォーマンス評価による指導と評価の一体化・・・・・・・・・・・・・１０
Ⅴ　授業に関するアンケート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
Ⅵ　「対話」と「協同」のある学びの授業スタンダード・・・・・・・・・・・１６
Ⅶ　個人研究テーマと具体的な手立て・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
Ⅷ　教育課程編制全体構想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８
Ⅸ　研究の実際（授業デザイン・リフレクション等）・・・・・・・・・・・・１９
Ⅹ　週時程・行事・会議等の工夫・改善・・・・・・・・・・・・・・・・・・６５
　週時程表の工夫・改善　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６５
　行事の精選（廃止や縮小）等の見直しについて・・・・・・・・・・・・・・６６
　国頭村立学校管理規則の改正について・・・・・・・・・・・・・・・・・・６７
　運動会を９月から１学期（６月）実施へ・・・・・・・・・・・・・・・・・６８
　各種行事・集会も「コの字」で・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６９
　個人研究と教職員評価システムとの連動・・・・・・・・・・・・・・・・・７０

Ⅰ　グランドデザイン

＜関係法規等＞
・教育基本法
・学校教育法
・学習指導要領
・沖縄県教育施策
・国頭村教育施策

校　訓
自学・自律・自力

学校教育目標
◎進んで学び　よく考える生徒（知）
◎人権を尊び　支え合い　助け合う生徒（徳）
◎心身ともに健康で　たくましい生徒（体）

・本校のめざす学校像
・本校のめざす生徒像
・本校の実態
・家庭や地域の実態
・保護者の思いや願い
・地域の思いや願い

「学びの共同体」の理念による学校改革　『一人残らず,すべての生徒の学びを保障する』

なぜ,「学びの共同体」か？

①「学びの共同体」づくりが,校訓「自学」「自律」「自力」や教育目標を具現化し，諸教育活動の充実に向けて，「一点突破」できると考えたため
②「学び続ける生徒は崩れない」という理念を基に,生徒指導の三機能(自己決定の場,自己存在感,共感的人間関係)を生かして,「積極的(予防的)な生徒指導」や「不登校生徒の改善」に繋がると考えたため
③教師主導の「教え込む授業」から生徒主体の「生徒の考えから出発する学び」に切り替えることにより,「習得・活用・探究型学習」及び「言語活動」を充実させることができると考えたため
④職員同士の「同僚性」を構築し,保護者や地域住民との連携を強化できると考えたため

重点目標
きき合い　学び合い　支え合う　美しい学校

心を磨く
黙動清掃
心を開く（伝える）
あいさつ
生徒会活動の充実

◎ゴミや落書きがなく，花いっぱいの美しくきれいな学校
◎美しくきれいなあいさつや歌声が響き渡る学校
◎美しくきれいな心を持った生徒と教師の集まる学校
◎「きき合い，学び合い，支え合う」美しくきれいな関係のある学校

心をつなぐ（絆）
歌　声
「心の教育」の充実
静黙読書
心と頭を鍛える

日常的に「きき合う」関係づくりとケアリング

続けたくなる授業改善と校内研修
□教師と生徒とのかかわりを変える
□「対話」と「協同」のある学び
□「聴く」「つなぐ」「もどす」「ケアする」
□積極的な授業公開と生徒の学びの姿を固有名で語る授業研究による同僚性の構築
□先進校視察・研究会への参加とその共有

ケアリングによる「きき合う学級」づくり
□生徒と生徒とのかかわりを変える
□「コの字型」机配置と小グループ活動
□生徒へのケアと生徒同士のケアにより，間違いや多様な考えを認め合う学級づくり
□「わからない」「教えて」が誰でも言え，「わからなさ」から始まる深い学びの構築

学校行事・会議等の工夫・改善
□行事・会議等とのかかわりを変える
□教育課程の「量」の確保と「質」の充実
□行事・会議等の精選と運営の工夫
□異学年交流（縦割り班活動）の推進
□教職員の多忙感の軽減

地域連携の改善・強化
□保護者・地域とのかかわりを変える
□保護者や地域住民の授業や行事等への参加と学校運営（学校評価）への参画の促進
□地域行事等への積極的な参加
□積極的な情報公開による正しい理解と協力

一点突破
キャリア教育の充実 ⇔ **道徳教育の充実** ⇔ **特別活動の充実** ⇔ **生徒指導の充実** ⇔ **部活動の充実**

生徒・保護者・地域に開かれた　地域と共に歩む　地域から「信頼される」「魅力ある」学校

Ⅱ　校内研修全体構想

＜関係法規等＞
・教育基本法
・学校教育法
・学習指導要領
・沖縄県教育施策
・国頭村教育施策

校　訓
自学・自律・自力

教育目標
◎進んで学び　よく考える生徒（知）
◎人権を尊び　支え合い　助け合う生徒（徳）
◎心身ともに健康で　たくましい生徒（体）

・本校のめざす学校像
・本校のめざす生徒像
・本校の実態
・家庭や地域の実態
・保護者の思いや願い
・地域の思いや願い

国頭学びの会「ゆい」
静かに　淡々と　楽しく
焦らず　無理せず
ゆっくりと
笑顔で　挑戦しよう

重点目標
きき合い　学び合い　支え合う　美しい学校

研究主題
きき合い　学び合い　支え合う　協同的な学び

続けたくなる授業改善
授業の雑拙ではなく，教科の壁を越え，生徒の学びの姿を名前を挙げて語り合い，同僚性を高める。

「学びの共同体」の理念による授業改革　『一人残らず,すべての生徒の学びを保障する』

「学びの共同体」づくりの三つの柱

授業改善
①教師のテンションを下げて,一方的に話さない。
②教室の机を「コの字」型に配置する。
③授業に「小グループ」の活動を取り入れる。

同僚性の構築
①全ての教師が,授業を２回以上,公開する。
②必ず,授業のリフレクション（研究協議）を行う。
③生徒の固有名で生徒の学びや育ちを語り合う。

保護者の学習参加
①積極的に情報公開し,理解と支援を得る。
②授業を保護者や地域住民に公開する。
③保護者の授業や行事への参加を促進する。

「授業改善」の三要素

活動（一斉,個人作業）
①観察する,読み返す,考えをまとめる,確かめる,操作的な活動をする,半具体物による思考等の知的な作業活動をする。
②モノを用いた推論や問題解決的な活動をする。
③対象とじっくり関わり,自分で何らかの考えを持つ活動をする。

協同（グループ活動）
①多様な考え方をすり合わせることによって互いの差異を認める。
②教師は援助が必要な生徒に必要な援助をする。
③生徒同士の関わりで，分かった生徒が分からない生徒をケアし，集団のレベルアップにつなげる。
④学びの結果をさらに深めたり，未知（ジャンプ）の課題に協同して挑戦する。

表現の共有（一斉）
①他者の話を聴き，自分なりの考えを創る。
②発表する生徒の考えと自分の考えの差異を確かめる。
③他者と関わる中で，自分の考えを吟味し，反省したり，考えを補強したり，拡げたりする。

「三つの対話」が三位一体となった協同的な学び

教材との対話
教材（モノ）との出会いと対話による＜世界づくり＞

他人との対話
他者との出会いと対話による＜仲間づくり＞

自己との対話
自分自身との出会いと対話による＜自分づくり＞

教師の仕事は三つ＋「ケアする」

聴　く
①その子の発言が教材のどことつながっているのか
②前の発言のどことつながっているのか
③その子自身の前の発言とどうつながっているのか

つなぐ
①教材と子どもをつなぐ
②子どもと子どもをつなぐ
③今日学んだことと前に学んだことをつなぐ
④教室で学んだことと社会で学んだこととつなぐ

もどす
①教材にもどす
②課題にもどす
③個からグループにもどす
④グループから全体にもどす
⑤全体から個にもどす
⑥既習事項や基礎的事項にもどす

ケアする
①生徒の目，仕草，顔の表情や身体の動きなどから生徒の困り感やつまらなさ等を感じたら，生徒の傍らでケアする。
②「１分ルール」：机に突っ伏している生徒に対して1分以内に声をかける。
③学びが停滞しているグループ，学びから外れている生徒がいるグループへ積極的に支援する。
④分からなくて困っている生徒がいたら，友達に依存できるような関係をつくる。「隣りに訊いてごらん」

『き（聴・訊）き合う』関係づくり ➡ 「わからない」「教えて！」から始まる　互恵的な学び

Ⅲ　研究の概要

1　研究主題

きき合い　学び合い　支え合う　協同的な学び

2　主題設定の理由

昨年度から，中学校において新学習指導要領による教育課程が完全実施された。今回の改訂では，「生きる力」の理念が引き継がれ，「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」等のいわゆる「習得・活用・探究型学習」の充実が強調されている。また，「教育内容に関する主な改善事項」では，とりわけ「言語活動の充実」を重視している。

沖縄県教育委員会は，「生きる力」の重要な要素である「確かな学力」の向上と「基本的な生活習慣の形成」について課題があることを明らかにした。

本校は，「きき合い　学び合い　支え合う　美しい学校」を本年度の教育目標に掲げ，全教育活動を通して「続けたくなる授業改善と校内研修」と「ケアリングによる『きき合う学級』づくり」を両輪とした学校づくりを目指している。様々な「人・モノ・こと」とのかかわりの中で「三つの対話」（「教材との対話」「他人との対話」「自己との対話」）が三位一体となった協同的な学びにより，生徒一人ひとりの学びを保障し，「確かな学力」の向上を目指したい。また，「三つの対話」を通した「学び合う学び」により，「言語活動の充実」や本県が目指す「なりたい自分」「なれる自分」を広げ，「学習意欲の向上」や「キャリア教育の視点を踏まえた『確かな学力』の向上」につながると考える。

なお，中央教育審議会は，「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」（2010年３月）の中で，従来の「技能・表現」では「技能を表現する」ことであったものを，今回は「思考・判断したことを表現する」ことと改められ，「活用型」学力を評価する視点を明確にした。さらには，このように「表現」したもの(「活用型」学力)を評価する方法として，「パフォーマンス評価」を推奨している。

さて，本校の実態を見てみると，自分の考えを持っているのに遠慮して話さなかったり，分からないのに仲間に「教えて」と言えない生徒がまだいる（「授業に関するアンケート結果」参照)。「対話と協同のある学び」の基盤となるのは，「聴き合う関係」である。互いに「聴き合う関係，ケアし合える関係，安心して学べる関係」ができたときに，初めて深い思考や学びが生まれる。生徒の考えから出発する学びへの授業改善には，「聴き合う学級づくり」が欠かせない。

また，授業改善を成功させるためには，教師同士が専門性を磨き合い，働く仲間として協力し合う「同僚性」を高める必要がある。そのために，すべての教師が授業を公開し合い，授業リフレクション（研究協議）でお互いを磨き合うことを繰り返す。教師の同僚性を高めることで，何でも話し合え，相談し合えるような居心地のいい職場（学校）となり，多忙感も軽減できる。そうした環境を創るためには，教師に時間的・精神的なゆとりを与える必要があり，週時程や学校行事・会議等を見直し，工夫・改善を図る必要がある。

なお，保護者や地域住民に授業を積極的に公開し，授業や行事等への参加や学校運営（学校評価）への参画を促進することにより，「地域教育資源」を活用した授業改善や学校改革に生かしたい。

3　研究内容

⑴ すべての教師が各教科等の授業で「聴き合う学級づくり」に取り組むことにより，「対話と協同のある学び」の基盤となる「聴き合う関係，ケアし合える関係，安心して学べる関係」を構築する。そのために，「授業に関するアンケート」を実施し，その結果を分析・考察することにより，対応策を見出す。

⑵ 「指導と評価の一体化」を図るため，パフォーマンス評価等について研究する。

⑶ すべての教師が授業を公開し，「教師が何をどう教えたか（指導法)」ではなく，「生徒が何をどう学んだか（生徒の学びの事実)」を視点に授業を観察し，生徒の固有名で具体的な姿を全員が

述べる授業リフレクション（研究協議）にすることにより，教科の壁を越えて「授業力（教師力）」を磨き合い，同僚性を構築する。

⑷ 各教科の「真正の学び」の授業を深めるため，個人または，教科のテーマを設定し，研究を推進するとともに，研究の進捗状況を教職員評価システムと連動する。また，公開授業研究会や研修会等へ職員を派遣し，授業力の向上を図る。

⑸ 授業時数や生徒と向き合う時間及び，教材研究の時間を確保し，多忙感を軽減するため，週時程や学校行事・会議等を見直し，工夫・改善を図る。

4　研究方針

⑴ 学校教育目標及び本年度の重点目標を全職員で共通理解し，目標達成のために研修を行う。

⑵ 校内研修と学力向上の推進が連動して実践できるようにする。

⑶ 全国学力状況調査，沖縄県到達度学習調査や「授業に関するアンケート」等の結果を分析・考察し，該当学年における課題を焦点化し，日々の授業に生かす。

⑷ 授業参観者は，割り当てられたグループの生徒の発言やつぶやき及び行動を観察し，授業における「生徒の学びの事実」を全員が述べる。

⑸ 全体研修会以外は，授業デザインシートを作成し，ずべての教師が年に２回以上，授業を公開する。

① 全体研修会：年３回実施（村・教育事務所の指導主事を招聘し，各学年代表による授業研究を全職員で実施する）

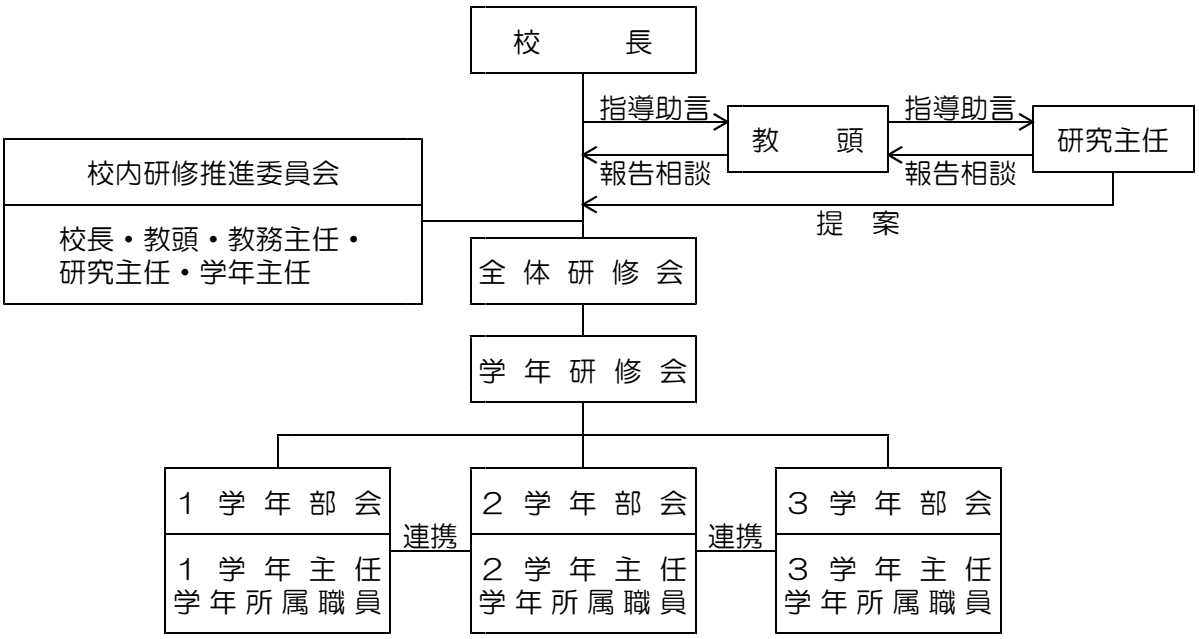
② 自主公開授業研究会：年１・２回実施（「学びの共同体研究会」スーパーバイザーを招聘し，全学級の公開授業と１学級の提案授業及び授業リフレクションを公開する。）

③ 学年研修会：年４回程度（各学年同じ日に授業をずらして実施し，放課後学年毎に授業リフレクション（研究協議）を実施する）

④ 各教科の「真正の学び」の授業を深めるため，個人または，教科のテーマを設定し，研究を推進する。

⑤ 研修報告：各種研修会や自主公開授業研究会へ参加した後，Ａ４版１枚程度で報告し，職員全体で共有する。

5　研究組織図



6　研究経過

(1) 平成24年度（1年次）

回	月　　日	研　修　内　容	担　当　者	招聘指導主事名	
				教育事務所	教育委員会
1	4月 4日（水）	・4月当初の学級経営 ・学び合い，支え合う学級		神山　英輝	岸本　琴恵 (名護市教委)
2	4月23日（月）	校内研修の進め方	研究主任		
3	5月 8日（火）	情報教育について	担当業者		
4	5月16日（水）	全体研修会① ３年Ｂ組：数学科	當真　克享	千葉　康成	宮城　尚志
5	6月14日（木）	学年研修会① １年Ａ組：英語科 ２年Ｂ組：社会科 ３年Ｂ組：国語科	各学年代表 仲栄真盛哲 松田　直人 佐藤　繁		
6	6月21日（木）	学年研修会② １年Ａ組：数学科 ２年Ｂ組：家庭科 ３年Ａ組：社会科	各学年代表 関　大喜 松田　廉子 渡慶次　靖		
7	7月 1日（日）	八女市立岡山小学校公開授業研究会参加(佐藤繁，當真克享)			
8	7月 6日（金）	自主公開授業研究会 ３・4校時：全学級授業公開 ５校時：数学科提案授業(3B)	６学級×２ 當真　克享	佐藤学（学習院大学教授）	
9	9月21日（金）	学年研修会③ １年Ｂ組：社会科 ２年Ｂ組：国語科 ３年Ａ組：社会科	各学年代表 松田　直人 佐藤　繁 渡慶次　靖		
10	9月26日（水）	学年研修会④ １年Ａ組：国語科 ２年Ａ組：音楽科 ３年Ａ組：数学科	各学年代表 古波津　睦 津波古　健 當真　克享		
11	10月18日（木）	八千代市立睦中学校公開授業研究会参加(神元勉，渡慶次靖，吉武佳穂)			
12	11月 7日（水）	全体研修会② ２年Ａ組：道　徳	松田　直人	久高利美子	宮城　尚志
13	11月 7日（水）	地区教育課程研究委員検証授業 ２年Ａ組：理　科	吉武　佳穂	教育課程研究委員	
14	11月12日（月）	教育課程研究集会 ２年B組：理　科	吉武　佳穂	神山　英輝	宮城　尚志
15	1月12日（土）	「学びの共同体研究会」冬季研究会参加(神元勉，當真克享)			
16	2月19日（火）	校内研修のまとめ	研究主任		
17	2月26日（火）	体験授業(村内小学6年生対象) １Ａ教室：国語科 １Ｂ教室：数学科	佐藤　繁 當真　克享		
18	3月15日（金）	八千代市立睦中学校視察(生徒３名，与那覇了,松田直人,比嘉司,吉武佳穂)			

(2) 平成25年度（2年次）

回	月　日	研　修　内　容	担　当　者	招聘指導主事名	
				教育事務所	教育委員会
1	4月 4日（木）	学びの共同体について			宮城　尚志
2	4月16日（火）	特別支援教育について	泉川　良範		
3	4月24日（水）	全体研修会① 3年Ｂ組：社会科	渡慶次　靖		宮城　尚志
4	5月 9日（木）	学年研修会① １年Ｂ組：音楽科 ２年Ａ組：数学科 ３年Ｂ組：国語科	各学年代表 津波古　健 波照間香織 佐藤　繁		
5	5月24日（金）	自主公開授業研究会 ３・4校時：全学級授業公開 ５校時：国語科提案授業(3A)	６学級×２ 佐藤　繁	佐藤学（学習院大学教授） 齋藤智哉(國學院大学准教授) 永島孝嗣(麻布教育研究所)	
6	6月12日（水）	学年研修会② １年B組：理　科 ２年B組：英語科 ３年B組：社会科	各学年代表 稲嶺　尚幸 比屋根　渚 渡慶次　靖		
7	7月 3日（水）	富士市立元吉原中学校公開授業研究会参加(與那嶺紀子，伊藝正乃)			
8	7月16日（火）	常陸太田市立峰山中学校公開授業研究会参加(津波古健，神元　勉)			
9	7月27・28日	「学びの共同体研究会」夏季研究会参加(渡慶次靖，久高利美子)			
10	7月30日（火）	「東海国語教育を学ぶ会」夏季セミナー参加(佐藤繁)			
11	9月 5日（木）	学年研修会③ １年A組：家庭科 １年A組：社会科 ３年A組：理　科	各学年代表 與那嶺紀子 東江　敏也 吉武　佳穂		宮城　尚志
12	9月19日（木）	全体研修会② ２年A組：道　徳	松田　直人	千葉　康成	宮城　尚志
13	10月16日（水）	キャリア教育の理解と演習		島袋ゆかり	
14	10月18日（金）	宮古島市立北小学校校内研修会参加(渡慶次靖，神元　勉)			
15	10月23日（水）	学年研修会④ １年Ａ組：国語科 ２年Ｂ組：保健体育科 ３年Ｂ組：数学科	各学年代表 伊藝　正乃 比嘉　司 神山　康平		宮城　尚志
16	10月27日（日）	名護市教育委員会・学習院大学共催 「学び合い支え合う授業づくりのためのセミナー(職員多数参加)			
17	11月 7日（木）	全国中学校社会科教育研究大会 大阪大会参加(渡慶次靖)			
18	11月29日（金）	県・村指定研究発表会 ５校時：全学級授業公開	研究主任 ６学級	渡具知久浩	宮城　尚志

(3) 平成25年度訪問者

No.	月　日	訪　問　者	備　考
1	4月19日（金）	小学館「総合教育技術」記者	授業の取材
2	5月24日（金）	佐藤　学　（学習院大学教授） 齋藤　智哉（國學院大学准教授） 永島　孝嗣（麻布教育研究所）	自主公開授業研究会 （スーパーバイザー）
3	8月14日（水）	大阪府の小学校教諭（本県出身）	各教室視察，夏期講座視察
4	10月29日（火）	学習院大学・台湾訪問団（約30名）	授業参観（２・３校時）
5	10月30日（水）	JICAインドネシア訪問団（約25名）	授業参観（３校時）
6	12月11日（水）	北海道大学	授業参観
7	2月　6日（木）	帝京大学	授業参観

7　授業研究の具体的な取組

(1) 生徒との対応を変える。

①　教師のテンションと声のトーンを下げて対応する。
声の小さい生徒，弱い生徒への配慮し，小さい声でも聴き合えるようにしたい。
深い沈黙と思考のあるしっとりとした授業を目指す。

②　教師が一方的にしゃべらない。（教室の声→教師20%，生徒80%）
教師の仕事は「聴く・つなぐ・もどす」＋「ケアする」に徹する。
教師の発信から受信へ，「教える」から，「気づかせる・考えさせる」発想へ転換する。

③　教師はゆっくりしたテンポで話す。教師の発問や生徒の発表後の「間」を大切にする。
「じっくり待つ」とは…しっかり考えさせる「間」を与えることである。

④　生徒とのかかわりを柔らかにしてじっくり対話する。
生徒のつぶやきや，顔の表情まで見取りたい（「何か言いたそう」の支援）。

⑤　生徒を怒って統制しない。大勢の前で一人を怒らない（個の尊厳）。
放課後や休み時間等に，個別にゆっくり静かに過ちを悟らせたい。

(2) 学習形態の配慮「コの字」型の机配置，「グループ活動」を位置づける。

①　「コの字」型に配置することの意義
ア　教師も，生徒同士も学級全体の各々の表情を見取りやすい。
イ　生徒が互いの意見を聴きやすい（仲間の意見や考えを聴くための机配置である）。
ウ　教師と生徒の距離が縮まり，つぶやきや生徒の困り感に対応しやすい。

②　「小グループ活動」を位置付けることの意義
ア　お互いの考えや意見のすり合わせの場として設定する。みんなの考えを一つにまとめる活動ではない。
イ　一斉授業では発表できない生徒でも，近くで小さい声で話せる場として設定する。特に弱い生徒への配慮である。「分からない」ことを聴ける雰囲気づくりを大事にする。
ウ　机の高さは可能な限り統一する（イスで高さ調整）。机は隙間なく，くっつける。
男女混合の編成にする。机の横には物を提げない。グループ間の距離をおく。
エ　学びが停滞しているグループ，学びから外れているグループへ積極的に支援する。

(3) まずは，「聴き合う学級づくり」に取り組む。

①　生徒同士が，互いの話を聴き合う雰囲気を学級内につくる。『聴く作法』

②　まずは，話の聴き方の手本として，教師が生徒の話を「眼」「体」「心」でしっかり受けとめて聴く姿勢を示す。生徒の発表途中に決して口を挟まず，すべてを受け入れる。

③　生徒の目線に合わせるために，教師の姿勢を低くする（イスに座る）。声の小さい生徒やつぶやきには，教師が寄り添って聴いてあげる。

④　困っている生徒が他者に依存しやすい雰囲気をつくる。
「わからない」「教えて」「意味分からん」が日常的に言える（認められる）ようにしたい。

⑷ 授業研究

「学びの共同体」にもとづく授業研究とは，優れた授業づくりのための理論や技術の習得を目指すものでなく，一人ひとりの生徒の学ぶ権利を保障し，高いレベルの学びに挑戦する機会を実現させる教師の専門性を高めることを目的としている。授業の中では，生徒達一人ひとりが教材や教師や仲間達とどのようにかかわり合いながら学んでいたのかを多角的に省察する。

学びの場としての授業研究会の目的（佐藤　学）

１）他者の授業実践や生徒の学習の様子から学ぶ。
２）自己の授業実践を振り返る。
３）同僚とともに学校が志向する授業のヴィジョンを共有する。

① 「『対話』と『協同』のある学びの授業スタンダード」を日々の授業改善に活用する。

② 公開授業・授業リフレクション（研究協議）のねらい

すべての教師が授業を公開し，「教師が何をどう教えたか（指導法）」ではなく，「生徒が何をどう学んだか（生徒の学びの事実）」を視点に授業を観察し，生徒の固有名で具体的な姿を全員が述べる授業リフレクション（研究協議）にすることにより，教科の壁を越えて「授業力（教師力）」を磨き合い，同僚性を構築する。

③ 授業研究の方針

ア　すべての教師が授業を公開する。
イ　授業者は，授業デザインシート（裏面に座席表）を作成し参観者へ配布する。
ウ　授業後のリフレクション（研究協議）に重きを置く（指導案作成など，事前に余分なエネルギーを注がない。同僚は授業についてアドバイスを求められたら必ず相談にのる）。
エ　校内研修のテーマを意識した授業の構築にこだわる。
オ　ビデオに収録し，授業の検証に役立てる。
カ　見せるための「すごい授業」でなく，日常の授業の公開を心がける。

④ 授業リフレクション（研究協議）の方針

ア　参観者は，割り当てられたグループを中心に生徒の表情やしぐさ，つぶやきや他とのかかわりの様子など，観察したことや授業を観察して学んだことを語り合う。
イ　参観者は，生徒の固有名（名前）を挙げて，「どこで『学び』があったか。どこで躓きがあったか。」など授業リフレクション（研究協議）の視点を踏まえて観察したことを話す。
ウ　優れた授業の追求ではなく，一人ひとりの生徒の学びを成立させることとその質を高めるために，生徒一人ひとりの学びの事実に対する教師の対応（聴く・つなぐ・もどす・ケアする）のあり方について省察する。
エ　形式的な文言や美辞麗句はさける。何も語らないのは授業者に失礼である。

⑤ 授業リフレクション（研究協議）の流れ

ア　担任からクラス状況の説明
　・全体像，気になる生徒，がんばっている生徒
イ　授業者コメント
　・ねらい，うまくいったこと，苦労したこと，困ったこと
ウ　授業に関しての協議
　・生徒の学びの事実，生徒同士のつながりやジャンプ課題の質を語る。
エ　自由発言
　・授業を見て学んだこと，生徒の学びの良さ，気になるグループ，生徒の学びの姿
オ　授業改善に向けて
　・今後の授業改善に向けて，研究協議から学んだことを授業者が語る。
カ　指導・助言
　・校長，教頭及び指導主事から指導・助言を行う。

8　成果と課題及び対応策

⑴ 成　果

① 「授業に関するアンケート」結果を昨年度と比較・分析・考察することにより，座席配置や小グループによる協同的な学び，聴き合う関係づくり等について，成果と課題及びその対応策を見出すことができた（「Ⅳ　授業に関するアンケート」参照）。

② すべての教師が「授業デザインシート」による授業公開ができた。また，生徒の学びの姿に視点を当てた授業参観や授業リフレクション（研究協議）により，教科の壁を越えた協議ができ，同僚性も高まった（「Ⅶ　研究の実際」参照）。

③ 各教科の「真正の学び」の授業を深めるため，個人または，教科のテーマを設定し（「Ⅵ　個人研究テーマと具体的な手立て」参照），研究の進捗状況を教職員評価システムと連動することができた。また，10名の職員を公開授業研究会や研修会等へ派遣できた（「Ⅲ　７研究経過⑵平成25年度」参照）。

④ 職員朝会，全体朝会，学年朝会を放課後に移動し，毎朝，「朝の読書」と「朝の会」を実施することにより，ゆったりと静かな雰囲気で円滑に授業を開始するとともに，生徒と向き合う時間が確保できた。また，行事・会議等の工夫・改善及び，村学校管理規則の改正により，１・２学年で17時間，３学年で52時間の授業時数を確保できた（「Ⅷ　週時程・行事・会議等の工夫・改善」参照）。

⑵ 課題及び対応策

① 自分の考えを持っているのに遠慮して話さなかったり，分からないのに仲間に「教えて」と言えない生徒がまだいる。特に2学年に課題がある（「Ⅳ　授業に関するアンケート」参照）。まずは，互いに「聴き合う関係，ケアし合える関係，安心して学べる関係」を構築したい。

② 「指導と評価の一体化」を図るためのパフォーマンス評価等についての研究は不十分であり，今後，理論研究や評価事例を積み重ねる必要がある。

③ 各教科の「真正の学び」の授業を深めるため個人または，教科の研究を推進・充実する必要がある。そのために，「三つの対話」（「教材との対話」「他人との対話」「自己との対話」）が三位一体となった協同的な学び（『Ⅴ　「対話」と「協同」のある学びの授業スタンダード』参照）を構築するとともに，共有課題やジャンプ課題の研究を深め，質の高い授業をデザインする必要がある。

④ これまで伝統的に行われてきた行事（校内駅伝大会等）や運動会種目等については，地域住民から継続の要望が根強く，見直すのが困難である。

9　参考文献

⑴ 佐藤学著「学校の挑戦」「教師達の挑戦」「教師花伝書」（小学館）
⑵ 佐藤学著「学校を改革する－学びの共同体の構想と実践－」（岩波書店）
⑶ 佐藤雅彰著「公立中学校の挑戦」「中学校における対話と協同」（ぎょうせい）
⑷ 大瀬敏昭著「学校を創る」「学校を変える」（小学館）
⑸ 田中耕治編著「パフォーマンス評価-思考力・判断力・表現力を育む授業づくり-」（ぎょうせい）

Ⅳ　「パフォーマンス評価」による指導と評価の一体化

1　なぜ，パフォーマンス評価か？

中央教育審議会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」2010年３月24日

「思考・判断・表現」として，従来の「思考・判断」に「表現」を加えて示した趣旨は，この観点に係る学習評価を言語活動を中心とした表現に係る活動や児童生徒の作品等(※3)と一体的に行うことを明確にするものである。このため，この観点を評価するに当たっては，単に文章，表や図に整理して記録するという表面的な現象を評価するものではなく，例えば，自ら取り組む課題を多面的に考察しているか，観察・実験の分析や解釈を通じ規則性を見いだしているかなど，基礎的・基本的な知識・技能を活用しつつ，各教科の内容等に即して思考・判断したことを，記録，要約，説明，論述，討論といった言語活動等を通じて評価するものであることに留意する必要がある。

(※3)　思考力・判断力・表現力等を評価するに当たって，「パフォーマンス評価」に取り組んでいる例も見られる。パフォーマンス評価とは，様々な学習活動の部分的な評価や実技の評価をするという単純なものから，レポートの作成や口頭発表等により評価するという複雑なものまでを意味している。または，それら筆記と実演を組み合わせたプロジェクトを通じて評価を行うことを指す場合もある。

従来の「技能・表現」では「技能を表現する」ことであったものを，今回は「思考・判断したことを表現する」ことと改められ，「活用型」学力を評価する視点が明確化された。さらには，このように「表現」したもの(「活用型」学力)を評価する方法として，上の中教審報告では，「パフォーマンス評価」を推奨している。

2　「パフォーマンス課題」と「ルーブリック」によるパフォーマンス評価

田中耕治編著「パフォーマンス評価-思考力・判断力・表現力を育む授業づくり」，ぎょうせい

パフォーマンス評価

伝統的な客観テストで評価される学力の様相には限界があることへの反省から，学力を総合的に評価するために近年登場した評価法。観察や対話，自由記述，実技を含めて，パフォーマンス(表現活動や表現物)をもとに評価する方法である。

パフォーマンス課題

パフォーマンス評価のために子どもたちに与えられる課題。パフォーマンス課題とは，リアルな文脈(あるいはシミュレーションの文脈)において，知識やスキルを総合して使いこなすことを求める課題である。

ルーブリック(評価指標)

パフォーマンス評価の方法を用いた場合，成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と，それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語からなる評価基準表である。そして，各尺度を典型的に示す作品例(アンカー)が準備される。なお，ルーブリックには，「特定課題のルーブリック」のほか，多種類のパフォーマンスを対象に適用できる「一般的ルーブリック」や，単元や学年を越えて長期的な成長を描き出す「長期的ルーブリック」もある。

3　評価の事例

(1) 学習内容　　２学年数学「一次関数の式を求めること」

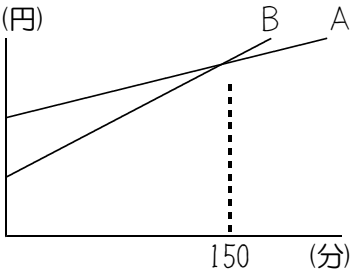
ある携帯電話会社には，次のような料金プランがあります。
マスオさんは，１ヵ月に平均180分通話します。
どのプランがお得でしょうか。

	月額基本料金	１分ごとの通話料
Ａプラン	3500円	30円
Ｂプラン	2000円	40円

⑵ 評価規準

料金表から一次関数を見出し，一次関数を用いて問題を解決することができる。(知識・理解，技能)

⑶ 評価基準表（ルーブリック）

<table>
<tr><th></th><th>十分満足（A）</th><th>おおむね満足（B）</th><th>不十分（C）</th></tr>
<tr><td>評価基準</td><td>各プランの特徴を一次関数の表，式，グラフの全てを利用して考察し，問題解決しようとしている。</td><td>各プランの特徴を一次関数の表，式，グラフのどちらかを利用して考察し，問題解決しようとしている。</td><td>各プランの特徴を一次関数の表，式，グラフを利用して考察し，問題解決することができない。</td></tr>
<tr><td>評価事例</td><td>A：y＝30x＋3500
B：y＝40x＋2000
<table><tr><td></td><td>0</td><td>30</td><td>60</td><td>90</td></tr><tr><td>A</td><td>3500</td><td>4400</td><td>5300</td><td>6200</td></tr><tr><td>B</td><td>2000</td><td>3200</td><td>4400</td><td>5600</td></tr></table>  150分以降は，Bのほうが高いので，180分通話するとAの方がお得である。</td><td>A：y＝30x＋3500
B：y＝40x＋2000
<table><tr><td></td><td>0</td><td>30</td><td>60</td><td>90</td></tr><tr><td>A</td><td>3500</td><td>4400</td><td>5300</td><td>6200</td></tr><tr><td>B</td><td>2000</td><td>3200</td><td>4400</td><td>5600</td></tr></table><table><tr><td></td><td>120</td><td>150</td><td>180</td><td>210</td></tr><tr><td>A</td><td>7100</td><td>8000</td><td>8900</td><td>9800</td></tr><tr><td>B</td><td>6800</td><td>8000</td><td>9200</td><td>10400</td></tr></table>①表から
②式から
A：y=30×180+3500=8900
B：y=40×180+2000=9200
180分通話すると，Aが8900円，Bが9200円なので，Aが300円お得である。</td><td>空欄であるか，記入していても表，式，グラフが間違っている。または，仲間のプリントを書き写しただけのもの。</td></tr>
<tr><td>判断のポイント</td><td>表，式，グラフを正しく書いており，表や式だけで無くグラフの交点から結論を導いている。</td><td>①グラフは書けていないが，表から結論を導いている。
②式に通話時間x=180を代入し，通話料金yを求めている。</td><td>＜支援の手立て＞
グループの仲間に「教えて」と訊くように促し，表，式，グラフの書き方を確認させる。</td></tr>
</table>

4　成果と課題

⑴ 成　果

① ノートやプリント等の記述を授業中のみならず，授業後にじっくり評価することができた。

② 評価する際，個々の生徒に必要な思考・表現を考えさせるコメント（赤ペン）を記入することができ，自分に足りない部分は何かを積極的に考え，調べたり聴いたりする姿が見られた。

③ 生徒一人ひとりの記述から，どこで躓いているのかを把握し，具体的な手立てを考えることができ，評価を指導に生かす実感が持てた。

⑵ 課　題

① 評価基準表（ルーブリック）の作成に，とても時間がかかること。

② 生徒の躓きや考え方を授業改善へ生かす手立てを工夫すること。一人ひとりのパフォーマンスを全員で共有できるよう授業改善すること。

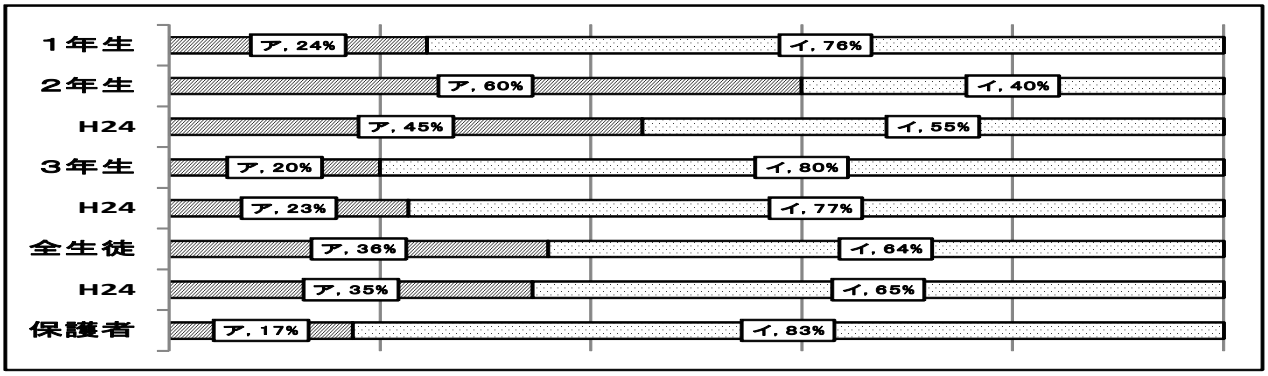
③ さらに，パフォーマンス課題とルーブリックによるパフォーマンス評価の理論研究や評価事例を積み重ねること。

Ⅴ　授業に関するアンケート

平成25年７月実施（１年４９人，２年50人，３年40人，計139人，保護者109人回答）

１　どの座席が良いと思いますか？

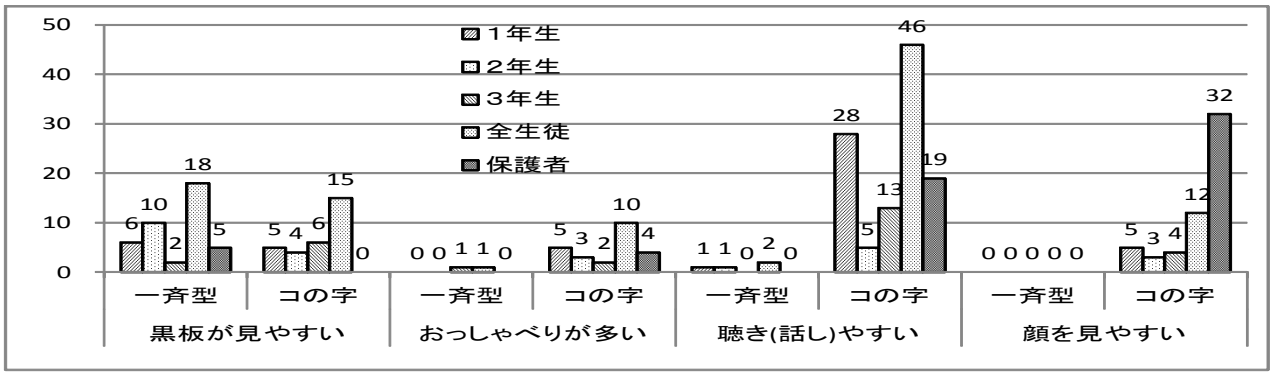
ア　全員が前（黒板）を向く座席(一斉型)　　イ　「コの字」型の座席



※　「H24」の数値は，平成24年7月実施の調査結果を示す。

考　察

①「コの字」型の座席を支持する割合が最も高いのは，保護者(83%)であり，3年生(80%)，1年生(76%)，2年生(40%)と続く。
②１年生が「コの字」型の座席を支持する割合(76%)が比較的高いのは，昨年度から小学校でも「コの字」型座席を導入していることと大きな関連があると思われる。
③２年生の「コの字」型座席の支持率(40%)は，昨年(55%)よりも低くなっており，２年生の学び合いに課題が残る。「コの字」型座席の良さを理解･実感させ，「きき合い，学び合い，支え合う協同的な学び」を推進･充実する必要がある。
④３年生の「コの字」型座席の支持率(80%)は，昨年(77%)よりも若干高くなっている。
⑤保護者の「コの字」型座席の支持率(83%)は，昨年12月調査(74%)よりも高くなっている。「コの字」型座席の良さを理解する保護者が増えていることがうかがえる。



ア　「全員が前（黒板）を向く座席」(一斉型)が良い理由

＜生　徒＞

①集中できる。勉強しやすい。(5)
②机移動するのがめんどくさい。(2)
③清掃の時に席がこんがらがう。(2)
④一人の方が落ち着く。
⑤小学校でもずっとこの形だから。

＜保護者＞

①「コの字」型は，夏場は隣同士くっつきすぎて暑いし，体臭も気になる。側の人がおしゃべりすると集中できない。
②「コの字」だと隣の人が近すぎる感じがする。
③集中できる。
④「コの字」だと体が斜めになり，姿勢が悪くなっていたので…。
⑤親としては，「コの字」はなじみのない座席配置なので。

イ　「コの字型の座席」が良い理由

＜生　徒＞

①グループ活動がしやすい。移動しやすい。(15)
②慣れたから！授業を受けやすく感じる！(4)
③真ん中に広いスペースができる。休み時間とかコの字の方が楽しいから。
④集中しやすい。
⑤全員が前を向く座席は，隙間があまりなく暑苦しい。コの字の方がすっきりしている。

＜保護者＞

①全員が前を向くと前の人をつついたり，前の人に隠れていたずらをしたりするのでは？(2)
②参観時の印象で，受ける授業ではなく，学び合っていると感じた。(2)
③授業に集中できる。(2)
④より多くの生徒が学習に積極的に参加できるようになったと思う。(2)
⑤みんなで一緒にという感じがある。前向きだと個人という感じ。
⑥ずっと前を向いての授業が当たり前と思っていたら，「コの字」型の授業の様子を見て，何だか発想の転換で，教室の雰囲気も明るい感じていいなと思います。

考　察

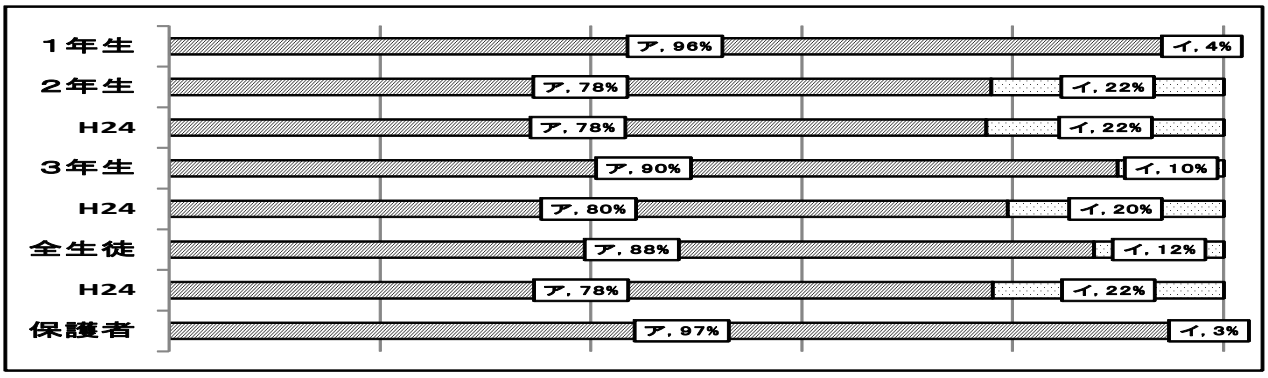
①「黒板が見やすい」の理由を挙げたのは，全校生徒で一斉型が18名，コの字型が15名で大差はない。3年間経験した3年生は，一斉型が2名，コの字型が６名と逆転しているのは興味深い。本校のコの字型の前後の重なりは，２名であり，一斉型にすると４・５名の重なりになる事を考えるとコの字型の方が黒板が見やすくなると考えられるので，検証が必要である。
②コの字にすると「おしゃべりが多くなる」の理由を挙げたのは，全校生徒で10名(7%)である。おしゃべりをするのは，座席配置よりも課題設定に原因があるのではないか？
③「き(聴・訊)きやすい，話しやすい，学びやすい」「全員の顔や表情が見やすい」などの理由を掲げたのは，コの字型が圧倒的に多い。
④一斉型を支持する理由には，「一人が落ち着く」「机移動がめんどくさい」など，他人とのかかわりが苦手で，机の移動を面倒がる傾向がうかがえる。その一方，コの字型を支持する理由には，「グループ活動がしやすい，座席移動がしやすい」など小グループ活動(協同的な学び)を積極的に受け入れている様子がうかがえる。

佐藤雅彰著「中学校における対話と協同」から

コの字型の座席配置は対話的な活動に都合がよい。この配置は，子どもが互いに聴き合うためである。子どもの発言は，小学校低学年から，教師に向けられ，教室のあなたたちに語られていない。コの字型は「発表している人の顔が見えるから」というよさもある。お互いの発言をきちんと受け止め合うことは対話的実践において重要な要素である。

２　小グループ活動を行った方がいいですか？

ア　小グループ活動を行った方が良い　　イ　小グループ活動は行わない方が良い



考　察

①小グループ活動を支持する割合が最も高いのは，保護者(97%)であり，１年生(96%)，３年生(90%)，２年生(78%)と続く。
②１年生が小グループ活動を支持する割合(96%)が高いのは，「コの字」型座席と同様に昨年度から小学校でも小グループ活動を導入していることと大きな関連があると思われる。
③２年生の小グループ活動を支持する割合(78%)は，昨年度と同じであるが，３年生は昨年度(80%)よりも10ポイント高くなっている。
④生徒，保護者共に小グループ活動を支持する割合の方が，「コの字」型座席を支持する割合よりも高い。「コの字」型座席は好まないが，小グループ活動を好む生徒や保護者が多いことがうかがえる。

ア　小グループ活動を行った方が良い理由

＜生　徒＞

①相手の意見を聴ける，言える。みんなで話し合える。学び合いができる。分からないことを訊ける。教えてもらえる。考えやすい。(103)

②先生にはききずらいが，友達と相談して授業に取り組んだ方が分かりやすく楽しい。人数が少ないので，みんなの意見が聴ける。(5)

③助け合ったり，協力し合うことができる。(4)

④楽しいから。(2)

＜保護者＞

①教え合える。話し合い，意見交換できる。助け合える。相談できる。他の人と一緒に考えることができる。みんなが授業に参加できる。いろんな考え方・アイデアが出て良い。(50)

②普段，消極的な生徒も参加せざるを得ないような状況になるので良い。集中できる。(2)

③学力の底辺を上げる為に良い。

イ　小グループ活動は行わない方が良い

＜生　徒＞

①グループ活動をしても話せる人がいなかったりしたら意味がないから。きき合いできない。(4)

②)隣の人や近くの人にきけばいい。イチイチ机を移動する時間がもったいない。いちいちグループに直すのが難儀。(6)

③おしゃべりが多くなる。(3)

④自分の意見を言うと間違っていると一方的に攻められるから。

⑤答だけを見ようとする人がいるから。

⑥人数が少なすぎて嫌だ。

＜保護者＞

①イスと机を動かす回数が多い。

②リーダー同士の争いがないか？

考　察

①小グループ活動を支持する理由に「相手の意見を聴ける，言える」「話し合える」「学び合える」など学びに関わる理由が生徒(103)，保護者(50)共に最も多い。

②小グループ活動を支持しない理由からは，「きき合いできない」など他とのかかわりが苦手で机の移動を面倒がる傾向がうかがえる。

③小グループ活動の良さを理解・実感させ，「きき合い，学び合い，支え合う」ためのケアリングを工夫するとともに，＜学びの作法＞を徹底したい。

佐藤雅彰著「中学校における対話と協同」から

グループ活動がうまくいくには，子ども同士の「あいだ」に間違いを認め，依存した時に丁寧にケアしてくれる人間関係が必要である。

一人では解けない子どもが自ら他者に尋ねることから始まる。他者に依存できる子どもは自立できる。

＜学びの作法＞

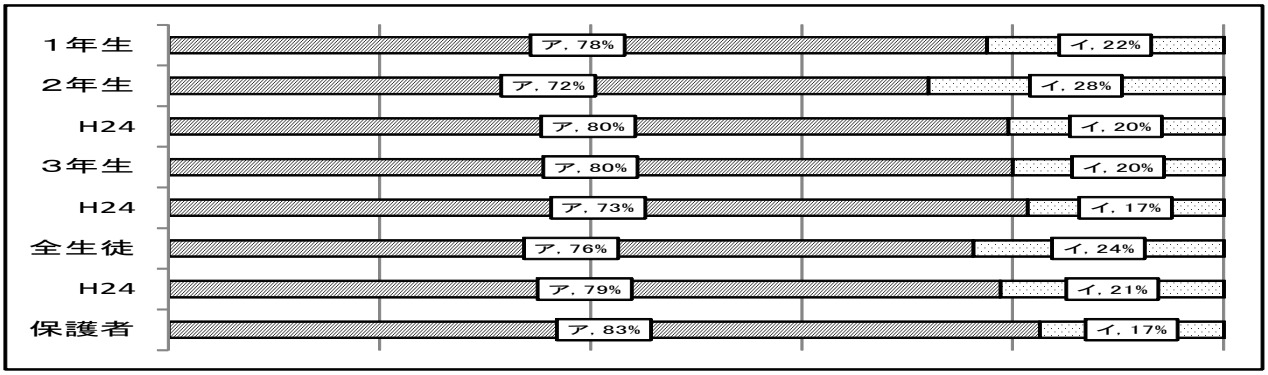
〇ルール１　分からなくなったら仲間に「教えて」と恥ずかしがらずに訊く。

〇ルール２　訊かれた子どもは，自分のアイディアを惜しみなく伝え，相手が納得するまで説明を繰り返す。

〇ルール３　できる子どもから「教えてやる」と言ってはいけない。

３　分からないことがあった時，「どうするの？」とか，「教えて？」と他の人に訊(き)いたり，他の人の意見に「どうして？」とか，「もっと詳しく話してくれる？」などと，互いに聴き合っていますか？

ア　どちらかと言うと，互いに聴き合っている　イ　どちらかと言うと，互いに聴き合っていない



考　察

①「どちらかと言うと，互いに聴き合っている」と回答した割合が最も高いのは，保護者(83%)であり，３年生(80%)，１年生(78%)，２年生(72%)と続く。また，３年生(80%)は昨年度(73%)よりも高い割合を示し，２年生(72%)は昨年度(80%)よりも低い割合を示している。ここでも２年生の「きき合い，学び合い，支え合う協同的な学び」に課題がある。

②「どちらかと言うと，互いに聴き合っている」と回答した保護者の割合(83%)は，昨年12月調査(73%)よりも高くなっている。

ア　どちらかと言うと，互いに聴き合っている理由

＜生　徒＞

①分からなかったら聴かないと分からないままだから。理解するため。(56)
②相手に教えたら，自分も理解できるからいい。相手が分かりやすいように伝えている。(9)
③分からないことがあったら，気軽に聴けるし，答えてくれる。(6)
④みんなの意見を聴きたいから。みんな意見を交換しているから。(5)
⑤小グループだからきき合える。質問しやすい。グループ活動を積極的に行うため。(3)
⑥先生より教えるのがうまい。生徒同士の方が聴き合いやすい。(2)
⑦互いの得意，不得意があるから。

＜保護者＞

①家でもよく質問する。よく話す。(7)
②授業参観を見てそう思えたので。子どもから聞いて。(5)
③小グループだと自分の気持ちや考えを話しやすい。聴きやすい状況にある。(5)
④自主的に発表する性格だから。
⑤分かりたいから。楽しいと言っていた。
⑥そうであって欲しい。

イ　どちらかと言うと，互いに聴き合っていない理由

＜生　徒＞

①恥ずかしい。聴きずらい。恥ずかしがって意見を言おうとしない。(7)
②自分で頑張って考える。わからない時は自分でやる。(7)
③おしゃべりしたり，授業に参加していない人がいるから。(3)
④聴くことがない。聴かなくても分かるから。(3)
⑤聴いてこないから。相手もできているから。(2)
⑥「教えて」と言っても教えてくれない。自分の意見を聴いてくれない。(2)
⑦そんなに親しくないし，説明するのも下手だから。
⑧聴き合うひまがない。

＜保護者＞

①自分の意見を積極的に言えるタイプではない。自ら聴いたりすることが少ない。(4)
②短時間の参観のため。(2)
③知りたいという欲求が低い。

考　察

①「どちらかと言うと，互いに聴き合っている」と回答した理由からは，「分かりたい，理解したい」という気持ちが強く，小グループで積極的に聴き合い，学び合っている様子がうかがえる。

②「どちらかと言うと，互いに聴き合っていない」と回答した理由からは，誰かに聴かなくても分かるから自分一人で課題に取り組む生徒がいる一方，分からなくても誰にも聴かず自分一人で頑張っている生徒の様子がうかがえる。

③「聴くのは恥ずかしい，聴きづらい」「教えてくれない，聴いてくれない」と感じている生徒がまだいる。「聴き合う関係(学級)づくり」を一層強化し，一人ひとりの意見が尊重され，間違いや多様な考え方が受け入れられ，生徒同士が支え合い，つながり合う関係(学級)づくりを目指したい。

④保護者は，家庭での状況，子どもの性格，子どもとの会話や授業参観の様子から判断している。家庭でも「きき合い，学び合い，支え合う」ことの大切さを話し合い，共有して欲しい。

佐藤雅彰著「中学校における対話と協同」から

＜話し合いの基礎＞

ア　人の話を互いに聴き合う(聴き合う関係をつくる)。
イ　他者の意見や考えに敬意を払う。
ウ　自分の考えの根拠や理由をもつ。
エ　根拠や理由をベースに自分の言葉で表現する。
オ　他者の意見に対して反応する。たとえば，疑問があれば質問する。わからなければ「わからない」と。「そうか」「なるほど」「エ～」などの響き合う言葉やうなずきを。

Ⅵ　「対話」と「協同」のある学びの授業スタンダード

※保清の行き届いた学習環境で，ざわつきがなく，しっとりとした雰囲気で授業を開始したい。

はじめ　授業の最初の10分間は黄金の時間（コの字）

(1) 机が離れていないか(机の横にバッグを掛けてないか)，机の上にいらない物を置いて精神的なバリケードをつくっていないか。

(2) ドリルや復習に時間をかけると学びから漏れる生徒が現れる。⇒できるだけ５～７分以内でグループにしたい。(グループで何をやったらいいかが分かるような的確な課題提示)

9分　最初の小グループ活動　『共有の学び(教科書レベル)』

(1) できるだけ素材やモノを媒介した「問題解決的思考」の活動を組み込む。

(2) 教師は，すぐにグループへかかわらない。まず，まかせてみる。本当にかかわらなければならないグループや子どもをじっくり見極める。※「1分ルール」突っ伏した生徒には1分以内に声をかける。

(3) 学びが停滞しているグループ，学びから外れている生徒がいるグループへの積極的な支援を行いたい(教えるのではなく，あくまでも支援に徹する。教えてしまうと，教師の教えを待つようになり，他の生徒に依存しなくなる)。生徒の目線に合わせるために，しゃがんで聴く。「いい先生は，ズボンにしわができる」

(4)「できた人は分からない人に教えてあげて」は禁句。「教え合いはお節介，学び合いはさり気ない優しさ」

(5) 分からなくて困っている生徒が，友達に依存できるような関係をつくる。「ここどうしたらいい？」「教えて!!」学びが成立しているのは，「ボソボソ」と「ここどうなってんの?」「こうじゃない」「Ａ君に訊いてごらん」訊くことができない生徒には，分かることと分からないことを分けてあげて，教師がかかわって，仲間とつなぐ。

(6) グループ活動は10分を目安に，暇をつくらせないよう，どんどんテンポよく！

(7) いくつかのグループで追求が終わっていると感じたり，騒々しくなってきたら，全てのグループが課題解決できなくても中断し，全体(コの字)にもどす。解決できたグループに発表させるのではなく，中断されたグループに自分達が解決できたところまでを発表してもらい，その後は全体で考える(全体につなぐ)。

※　４人グループでやる最大のメリットは，(誰もが参加せざるを得ない状況への)強制力。「島」にして「孤立」させる。教室の真ん中を空けすぎない。グループをくっ付けすぎない。

20分　全体でのすり合わせ（場合によっては省略可）

(1) 教師のポジショニング　教室に立った時に一番端の生徒とも必ずつながり，生徒と生徒をつなぐ位置取りを考える。

(2) 教師のトーンを落とし，教師も生徒もテンションを下げる。

(3) 教師が一方的にしゃべらない(教師の発言２割)。意図的な指名「発言は女子7割，男子3割がちょうどいいくらい！」いつ，誰が指名されるか分からない状況にして，指名された時に答えられるよう，聴かざるを得ない緊張感を持たせる。

(4) 生徒に訊くときは，訊く内容を先に，名前を後に！名前を先に言うと，他の生徒が考えなくなる。

(5) ゆっくりしたテンポで，間を大事に「待つ」姿勢を！生徒の発言にすぐに反応しない。

(6) 生徒とのかかわりを柔らかにして，じっくりと対話する(「つなぐ」「もどす」言葉かけを！)。

2回目の小グループ活動　『ジャンプの学び(教科書以上のレベル)』

(1) クラスの半分くらいの生徒に「わからない」と言わせるような「背伸びとジャンプのある」高いレベルの課題を設定する。学力が低いほど，高いレベルの授業をする。

(2) ジャンプ課題とは，一人では解決できず，仲間と交流することによってしか解決できない課題。※ジャンプができない時は，ヒントとかアドバイスなど，何か仕掛けを用意する。ヒントを早く出すとお節介。

40分　全体でのすり合わせ（コの字）

(1)「つなぐ」言葉かけ

①「Aさんの意見を聞いて，どう思う？」

②「Aさんの言いたかったこと，誰か話してくれる」

③「Aさんの意見と似ている人はいない？」

④「AさんとBさんの考えのどこが違う(同じ)？」

⑤「もう少し詳しく話してくれる？」

⑥「〇〇を見てどんなことを感じた？」

(2)「もどす」言葉かけ

①「その考え，どこからそう思ったのか，教えてくれる？」

②「～って言っていたけど，どういうことかな？」

③「どの言葉からそう思ったの？」(文章に戻る)

④「どうして，そう思ったの？」(テキストに戻る)

50分　⑤「前にも同じようなことはなかったかな？」(既習事項に戻る)

小さい声の生徒へのケア

「あなたの言っていることは素晴らしいから，もう一度言ってくれる？」「素晴らしいことを言っているから聴いてあげて！」

聴いていない生徒へのケア

注意はやる気を削ぐので，近くの生徒から順番に指名するなどして，ごく自然にその生徒に発言の機会を持っていくと，発言のために聴かなければならなくなる。

「A君と同じです。」と答えたら

「あなたの言葉で説明してごらん！」と切り返す。

一人残らず，すべての生徒の学びを保障する

Ⅶ　個人研究テーマと具体的な手立て

共通テーマ 「きき合い，学び合い，支え合う協同的な学び」

No.	教　諭　名	教　科	個人テーマ	具体的な手立て
1	佐藤　繁	国語科	生徒と言葉をつなぎ，生徒と生徒をつなぎながら文章を読み深める授業の研究	音読や黙読を取り入れながら，文章と向き合い，互いの読みを聴き合う中で，生徒一人ひとりの読みを深める。
2	伊藝　正乃	国語科	言葉を通して文章の内容を理解した上で，自分の考えを論理的に表現する力を高める授業の研究	音読や語句の意味調べを行う。自他の考えの根拠となる部分を意識させる。思考がずれた場合は教科書に戻り，考えを促す。
3	渡慶次　靖	社会科	諸資料に基づいて多面的・多角的に考察させる授業の研究	統計，グラフ，地図等の資料を提示し，考察させる授業を展開する。
4	松田　直人 東江　敏也	社会科	『読み取り・解釈・説明』を協同的な学びの中で行える授業の研究	3つの過程をグループ活動の中で行えるように教材や資料を充実させ，思考を深めさせる。
5	波照間香織 神山　康平	数学科	自主的に学ぶ意欲を育て，きき合うことで数学的な見方や考え方を高める授業の研究	「きき合い，学び合う」ことで課題を解決し，達成感のある授業にするとともに，ジャンプ課題を工夫する。
6	吉武　佳穂	理　科	きき合いながら事物・事象のしくみや繋がりを発見し，表現する授業の研究	ワークシートの内容の工夫や生徒の言葉を「聴く・つなぐ・もどす」ことを通して，言葉や図などで表現する活動を豊かにする。
7	稲嶺　尚幸	理　科	身近にある自然の事物・事象をきき合い，学び合いながら科学的に思考し，表現する授業の研究	授業規律を徹底し，生徒同士で協力し合うようにグループ活動を促し，生徒の思考を意識したワークシートを作成する。
8	津波古　健	音楽科	周囲の声と自分の声を聴き合い，表現力と発声力を高める授業の研究	各声部や異声部編成のグループ活動で声を聴き合い，個々の意見を交流し合う中で，表現力と発声力を高める。
9	比嘉　司	保健体育科	学びの共同体の理念を通して聴き合い学び合いながら活動できる授業の研究	グループでの聴き合い，学び合いを通して，技術の向上を図るとともに，楽しい体育の授業を作る。
10	與那嶺紀子	家庭科	自分の生活を振り返り，課題を見つけ解決していける授業の研究	身近な話題や自分の事として捉えやすいような教材研究に力を入れる。
11	比屋根　渚	英語科	「対話」と「協同」の学び合いにより英語のコミュニケーション能力を高める授業の研究	ペア，グループ活動を効果的に導入し，リズム感のある授業を心がけ，自分の考えなどを表現させる。

Ⅷ　教育課程編成全体構想

＜関係法規等＞
・教育基本法
・学校教育法
・学習指導要領
・沖縄県教育施策
・国頭村教育施策

校　訓
自学・自律・自力

学校教育目標
◎進んで学び　よく考える生徒（知）
◎人権を尊び　支え合い　助け合う生徒（徳）
◎心身ともに健康で　たくましい生徒（体）

・本校のめざす学校像
・本校のめざす生徒像
・本校の実態
・家庭や地域の実態
・保護者の思いや願い
・地域の思いや願い

「学びの共同体」の理念に基づく学校改革

重 点 目 標
きき合い　学び合い　支え合う　美しい学校

「黙動清掃」
「静黙読書」
「あいさつ」「歌声」

学習指導要領の趣旨及び目標・内容

教 育 課 程 編 成

①教育の理念としての「生きる力」を重視(継承)し，知識・技能の習得とこれらを活用する能力の育成のバランスを重視した教育課程
②「目標の達成」(教育基本法「教育の目標」，学校教育法「義務教育の目標」，「中学校教育の目標」)を重視した教育課程
③道徳の時間を「要」として位置付け，体験活動との関連を重視した教育課程
④体育・健康に関する指導について，「食育」と「安全指導」を追記した教育課程

編成方針
①諸法令，学習指導要領及び地域・学校・生徒の実態を踏まえ，人間として調和の取れた生徒の育成を目指して編成する。
②授業が横断的（系統的）・効果的に実施できるように，各教科等や学校行事等相互の関連を考慮して，年間指導計画を編成する。
③通常の教育活動の評価や学校評価の結果について，成果と課題を検証・分析し，必要な改善策を踏まえて編成する。

配慮事項
①週時程の工夫　②授業時数の管理，点検・評価　③時数増に伴う指導の工夫　④言語活動の充実　⑤言語環境の整備　⑥問題解決的な学習の充実　⑦体験的な学習及び体験活動の充実　⑧生徒一人ひとりの実態に応じた指導と評価の充実　⑨特別な支援を要する生徒の指導の充実　⑩教育活動全体で推進する道徳教育の充実　⑪キャリア教育の充実　⑫伝統や文化についての指導の充実　⑬学級経営の充実　⑭部活動の意義を踏まえた適正な活動

教育課程編成の具体方針

学　習　指　導

①学校教育法施行規則第73条の別表２により，授業時数を配当する。

教科名	１年	２年	３年
国　語	140(4)	140(4)	105(3)
社　会	105(3)	105(3)	140(4)
数　学	140(4)	105(3)	140(4)
理　科	105(3)	140(4)	140(4)
音　楽	45(1.3)	35(1)	35(1)
美　術	45(1.3)	35(1)	35(1)
保健体育	105(3)	105(3)	105(3)
技術家庭	70(2)	70(2)	35(1)
英　語	140(4)	140(4)	140(4)

( )の数字は，週当たりの授業時間
②基礎的・基本的な知識・技能の習得
③思考力・判断力・表現力等の育成
④主体的に学習に取り組む態度の育成
⑤学習を支える力（学習規律）の育成
⑥指導方法の工夫改善（すべての生徒の学びの保証）「校内研修全体構想」
⑦ＩＣＴ機器や教材・教具の活用
⑧諸学力調査結果の課題への対応
⑨キャリア教育の４能力との関連
⑩図書館活用と読書活動の充実
⑪観点別評価規準の設定
⑫環境・平和・情報・図書館活用との関連

道　　徳

①全体計画と別葉の作成
②学校教育全般に渡る道徳性の育成
③道徳の時間を「要」とした補充・深化・統合と交流(波及)の相互作用
④道徳教育推進教師を中心とした指導体制の確立
⑤道徳性を育成する体験活動の充実
⑥学校教育目標「人権を尊び…」を意識した実践
⑦毎週１単位，年間35時間を配当
⑧重点指導内容：「生命尊重」と「思いやり」
⑨指導方針
・全教師の共通理解の下，全校体制で推進
・「国中人権宣言」に基づいた道徳教育の推進
・校訓「自学・自律・自力」に関連付けた効果的な道徳教育
・地域教育資源の活用
・「心のノート」等の活用
・美しくきれいな学校づくり

特　別　活　動

①学習指導要領の目標及び内容に従
②毎週１単位時間，年間35時間の学級活動を設定
③学校行事の精選
④期待感・達成感が味わえるような学校行事の工夫・改善
⑤生徒と教師，生徒同士の人間関係を育成する学校行事や生徒会活動
⑥自発的・自治的能力を高める生徒会活動
⑦学校行事
・儀式的行事：新任式，始業式，入学式，終業式，卒業式，修了式，離任式
・文化的行事：音楽発表会
・健康安全・体育的行事：身体測定，各種検診，交通安全指導，各種避難訓練，運動会，校内駅伝
・旅行・集団宿泊的行事：宿泊体験（１年），職場体験（２年），修学旅行（３年）
・勤労生産・奉仕的行事：大清掃
⑧生徒会活動：新入生歓迎球技大会，生徒総会，選手激励会，生徒会役員選挙，3年生を送る会
⑨異学年交流(縦割り班活動)の推進

総合的な学習の時間

①年間授業時数は，１年：50時間，２・３年：70時間を配当
②全職員体制により，学校テーマのもと，系統的な学習を展開する。
③「今，求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（中学校編）」（H22年11月，文部科学省）を活用して，年間指導計画を作成する。
④地域教育資源（施設・設備・学習素材・地域人材等）を活用して，探求的な学習を意図的・計画的に取り入れる。

その他

①国際理解教育・外国語教育
②情報教育　③環境教育　④福祉・ボランティア教育　⑤平和教育　⑥人権教育　⑦危機管理　⑧生徒指導　⑨特別支援教育　⑩健康・食の教育　⑪キャリア教育　⑫図書館教育　⑬小・中連携教育　⑭教職員の服務・規律　⑮各種委員会(学校評議員,家庭教育を支援する会,特別支援教育委員会,適正就学指導委員会,学校保健委員会)

年 間 指 導 計 画 作 成 時 の 配 慮 事 項

①学習指導要領に則り，沖縄県や国頭村の教育施策を踏まえて作成する。
②計画的・効果的な地域教育資源の活用を年間指導計画に位置付ける。
③全国学習状況調査や県到達度調査の結果を分析・考察し，各教科の年間指導計画及び授業改善に生かすとともに，国語・数学の形成確認問題を年間指導計画に位置付け，計画的に形成的評価として活用する。
④各教科等の指導に当たっては，ＩＣＴ機器の活用を意図的に計画するとともに，ＩＣＴ活用の「光」と「陰」についての指導を強化する。
⑤主体的・意欲的な学習態度を育成するために，積極的に学校図書館を活用できるよう年間指導計画に位置付ける。

指 導 計 画 の 作 成

①学力向上推進　②校内研修計画　③視聴覚教育　④情報教育　⑤図書館教育　⑥人権教育　⑦環境教育　⑧生徒指導全体計画　⑨教育相談全体計画　⑩学校保健　⑪学校給食　⑫学校安全指導計画　⑬特別支援教育　⑭防災計画　⑮部活動　⑯特別活動（学級活動，進路指導，生徒会活動）⑰道徳教育（別冊）　⑱各教科の年間指導計画（別冊）　⑲総合的な学習の時間（別冊）　※①～⑯はファイリング